



水稲品種「愛知125号」の多収栽培法

— 飼料米の収量を向上し、経営安定を図ります —

開発の背景・ニーズ

近年の米価の低迷により、稲作農家の所得は減少しています。このため、稲作農家の所得確保の手段として水田活用の直接支払交付金の対象となる飼料用米の作付が注目されています。しかし、交付金の上限額である10万5千円/10aを得るには、660kg/10a以上（愛知県平均）の収量が必要です。そこで、平成27年に開発した品種「愛知125号」を飼料用米として栽培する際に、660kg/10a以上の収量が得られる多収栽培法の開発に取り組みました。

成果の内容

移植栽培での「愛知125号」の収量増加には、登熟歩合を高めるために出穂後の有効積算気温（日平均気温－15℃）を確保できるよう、移植時期は5月中旬が適することを明らかにしました。

施肥量は、成熟期までの窒素吸収量が14kg/10a以上とした場合、大幅に収量が増加しました。また、V溝直播栽培では出芽の安定が収量増につながるため、種籾の休眠打破が必要であることを明らかにしました。

休眠打破法は、種籾を40℃の加湿条件下に5～7日間置くことが一般的ですが、農家では、種籾を冬場に1か月程度温室に静置する方法が簡単で有効でした。

これらの技術は「愛知125号」の高品質生産マニュアルとしてとりまとめ、公表しています。

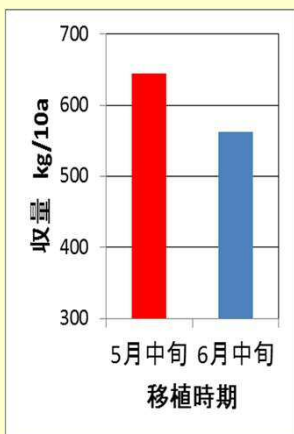


図1 移植時期と収量

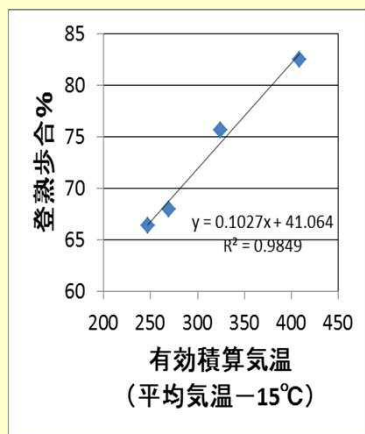


図2 有効積算温度と登熟歩合の関係

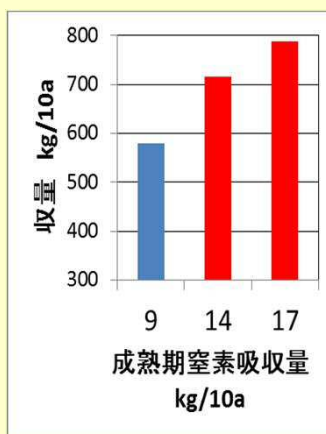


図3 成熟期窒素吸収量と収量

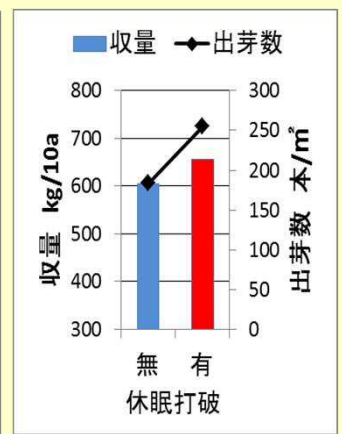


図4 V溝直播栽培における休眠打破の有無による出芽数と収量

愛知県農業への貢献

「愛知125号」の多収栽培法により飼料用米の収量が向上し、稲作農家の所得向上に寄与します。